

批判的社会理論の運動研究への応用可能性

—アクセル・ホネットとニック・クロスリーからの示唆—

静岡大学 佐藤直樹

1 目的

本報告では、批判的社会理論、特に、アクセル・ホネットとニック・クロスリーの所論と社会運動研究との接点について論じ、その応用可能性について提示したい。

2 方法

アクセル・ホネット、ニック・クロスリーの社会運動に関する所論の共通点を準拠点とする。アクセル・ホネットの議論は承認論として知られており、同理論の社会運動研究への応用について、『承認闘争と社会運動』（ホブソンら）において指摘されている。ホブソンらは、承認闘争を巡って近年の社会運動が展開されるとして、次のような図式を示す。1) 非承認や未分配の生起、2) 国内・国内外におけるフレーミング、3) 政治的機会の利用や言説的資源の利用、3) 結果として承認や再分配の以上の順である。ホネット承認論は、特に1) の段階における非承認による承認欲求についての理論的背景として参照されている。ニック・クロスリーは『社会運動の意義（邦題名：社会運動とは何か）』や『批判的社会理論のキーコンセプト（邦題名：社会学のキーコンセプト—批判的社会理論の基礎概念 57）』において社会運動による社会変動の中心的な現象が、異説形成を含む実践であるとしている。両者に共通するのは、身体実践を含む相互行為論を核としている点である。

3 結果

ホネット、及びクロスリーともに出発点とするのは、自他関係による相互行為である。ホネットにおいて、相互行為は「人間存在にとっての基本的な承認行為」であり、クロスリーにおいて、相互行為は「人間が社会的存在なるところの根拠」である。ホネットは、あるインタビューで、例としてネオナチの運動参加者への聞き取り調査を取り上げ、調査者と非調査者との承認関係の構築による社会批判の可能性を指摘している。クロスリーは、社会批判的な異説形成の実践による社会変動の可能性を指摘し、そうした実践のもととなるのが、相互行為であることを指摘している。

4 結論

クロスリーは、社会運動による社会変動には、ドクサを明るみに出すことが必要であることを指摘している。文脈は異なるが、ホネットは、前出のインタビューの中で、日常は無視され抑圧された言葉を発見することが、聞き取り調査の役割であることを指摘している。ドクサを明るみに出し、無視され抑圧された言葉を発見することによって、共有されるのは、社会批判的な世界観であり、ホネットの展望によれば新しい道徳の想像である。運動参加者への聞き取り調査における相互行為、それ自体が、質的データの取得のみならず、社会批判的行為ともなりえることが、批判的社会理論からの運動研究への重要な示唆である。

文献（主たるもの）

Crossley, N. 2002 Making Sense of Social Movements, Open University Press UK Limited.

Honneth, A. 2000 Die soziale Dynamik von Mißachtung. Zur Ortbestimmung einer kritischen Gesellschaftstheorie, in Das Andere der Gerechtigkeit, Aufsätze zur praktischen Philosophie, Suhrkamp.

———, 2002=Anders, P. & Rasmus, W. 2002 “An Interview with Axel Honneth: The Role of Sociology in the Theory of Recognition”, European Journal of Social Theory, 5(2), pp.265-277.